

17)キレンゲショウマ(黄蓮華升麻)

キレンゲショウマはユキノシタ科の多年草で、茎は高さ 1m 前後となり、浅く掌状に分裂した大形の葉を対生してつける。夏から秋にかけて、茎の先端に黄色でやや厚みのある花卉の花を、数輪ずつまとめてまばらにつける。主に石灰岩地帯を好み、深山の湿った木陰にまれに生えるが、人里はなれた山奥ゆえに群落することも少なくない。日本での主な自生地は紀伊半島の大峰(オオミネ)山系、四国、九州の高山帯、海外では朝鮮、中国東部にも分布する。和名の由来はレンゲショウマに似た黄色の花を咲かせるためである。学名は『*Kirengeshoma palmata*』で、属名はキレンゲショウマそのものを、種小辞は掌状を意味しており、葉の形状に由来する。

キレンゲショウマほど多くのドラマに彩られた植物はそうそうないだろう。最初に発見されたのは明治 21 年(1888 年)8 月 3 日のことだった。当時高知県で教師をするかたわら、同県人の牧野富太郎博士の協力者として、コケやシダの研究に没頭していた吉永虎馬は、西日本最高峰の石鎚山の山中で、「美しき花を着けたる大なる見慣れざる植物(キレンゲショウマ)」を発見した。同じ頃、東京大学の初代植物学教授だった矢田部良吉博士も石鎚方面を目指しながら、高知県池川町で大雨のため足止めされていた。吉永はこの植物を矢田部博士のもとへ持参して鑑定を請うたのである。すると博士も『初めて見る植物ゆえ、その所属の見当もつかず、いくらかレンゲショウマに似ているところから「キレンゲショウマ(黄色のレンゲショウマ)」とでも言ったらよいだろう。帰京後に調べてみる』とのことだった。こうしてキレンゲショウマは日の目を見るようになったのである。その後、吉永虎馬は矢田部博士と同行し、筒上山から石鎚山に向かう途中で再びこの花を発見し採取した。しかし吉永虎馬が初めて発見した石鎚山の地点には矢田部博士の一行は誰も行かなかったという。にもかかわらず、学会では矢田部博士自らが石鎚山の標高 5000 フィート以上の疎林中でこの植物を初めて発見したと報告。いわば吉永の功績を横取りしてしまったのだという。このためキレンゲショウマの学名の命名者は YATABE となっている。このようなことは牧野富太郎博士と矢田部教授との間にもあったようで、このキレンゲショウマはユキノシタ科と判明したにもかかわらず、レンゲショウマと同様にウマノアシガタ科(現在はキンポウゲ科)であることを訂正しようとしなかったことを、後に牧野博士は苦々しく述解している。こうした経緯もあって、牧野富太郎と学閥との軋轢はそれ以前もそれ以後も長く続くこととなった。

さてこのキレンゲショウマを日本の代表的な野草として全国に知らしめた作家がいる。同じく高知県出身の宮尾登美子である。彼女は 1996 年 8 月 25 日から 1997 年 2 月 23 日まで、徳島新聞で『天蓋の花』として半年間連載、1998 年には集英社から単行本として出版。翌年には NHK でもテレビドラマ化されて、多くの人々からも知られるようになり、今日に至っているが、有名になりすぎて絶滅が危惧されている。



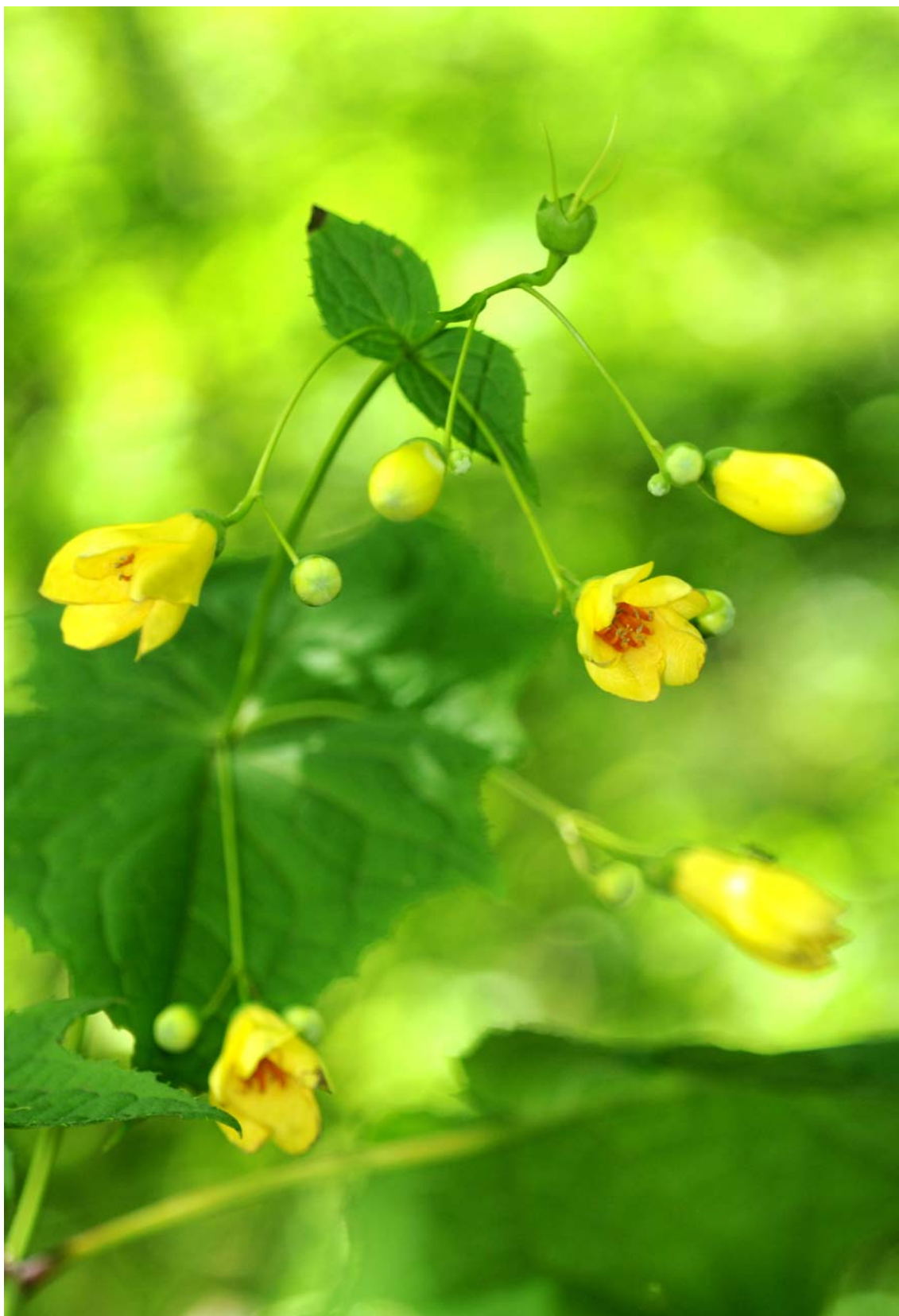
ふくらんで来たキレンゲショウマの蕾(長野県軽井沢町 2012. 08. 22)。この翌週の8月29日ちょうど開花している頃だろうと思って再度この場所を尋ねた。ところが10数個ついていたはずの蕾は、付け根からむしりとられていた。去年の秋からこの花が咲くのを心待ちにしていた。無念でならなかった。悔しかった。せめて写真を撮った後にしてほしかった。しかしどうしてこんなことをする人がいるのだろうか。屈折した心をもって、やましい人生を生きてきたのだろう。彼の心の闇がこの花で綺麗に晴らせることが出来たのなら、それでもいいだろう。しかしだとしたら、花はきっと美しく咲き誇っていたに違いない。人間の心の憤りを花にぶつけたところで、花は微笑んではくれない。花を愛することによってのみ、人は心を洗われ、心を癒されるのである。この人間のおかげでこの花が開花した美しい姿を、諸兄にお見せできないのが残念である。美しい野草を採らなければならないこともあるだろう。美しい木の花を切らなければならないこともある。しかし花は人間に対して無力である。人間はそれをいいことにしばしば植物に対して、また動物に対しても残酷なやり方で命を奪う。しかし絶対にこのような無残なやり方で生き物を採ってはいけないと思う。キレンゲショウマをむしったところで、食べることも花瓶に入れて楽しむことも出来ないだろう。また来年この花が咲くころに、ここへ来ることにしよう。きつともっとたくさん蕾をつけて迎え入れてくれることだろう。そのときの写真をここに掲出することをお約束したい。



この花は一度にいくつもの花が咲き揃うことはあまりないようで、一つ散ると一つ咲きを、くりかえしながら咲いてゆく。ごらんのように咲きガラと若いつぼみが混在している。



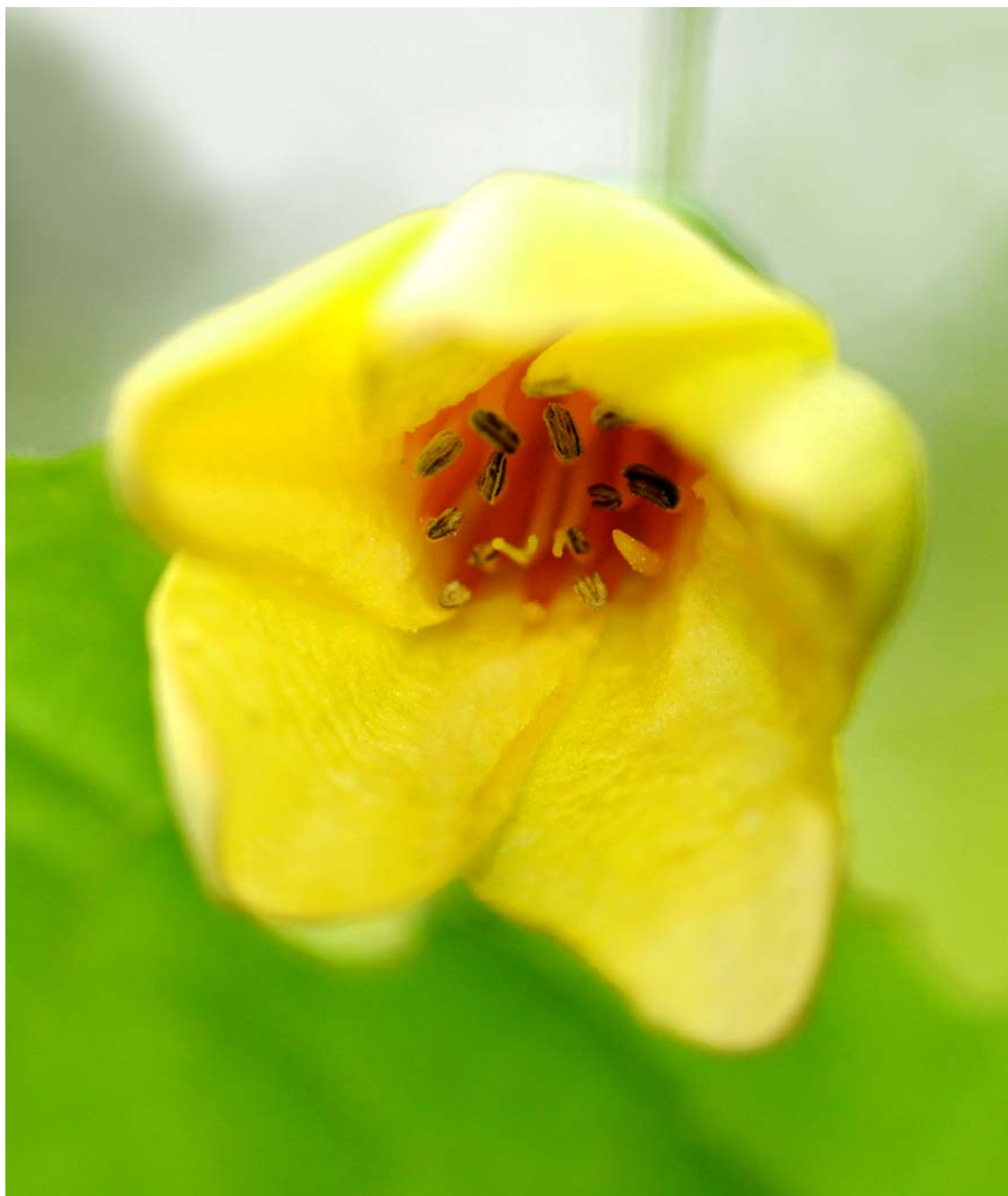
足場が悪くてなかなか正面からの写真が撮れない。もう一工夫が必要だ。



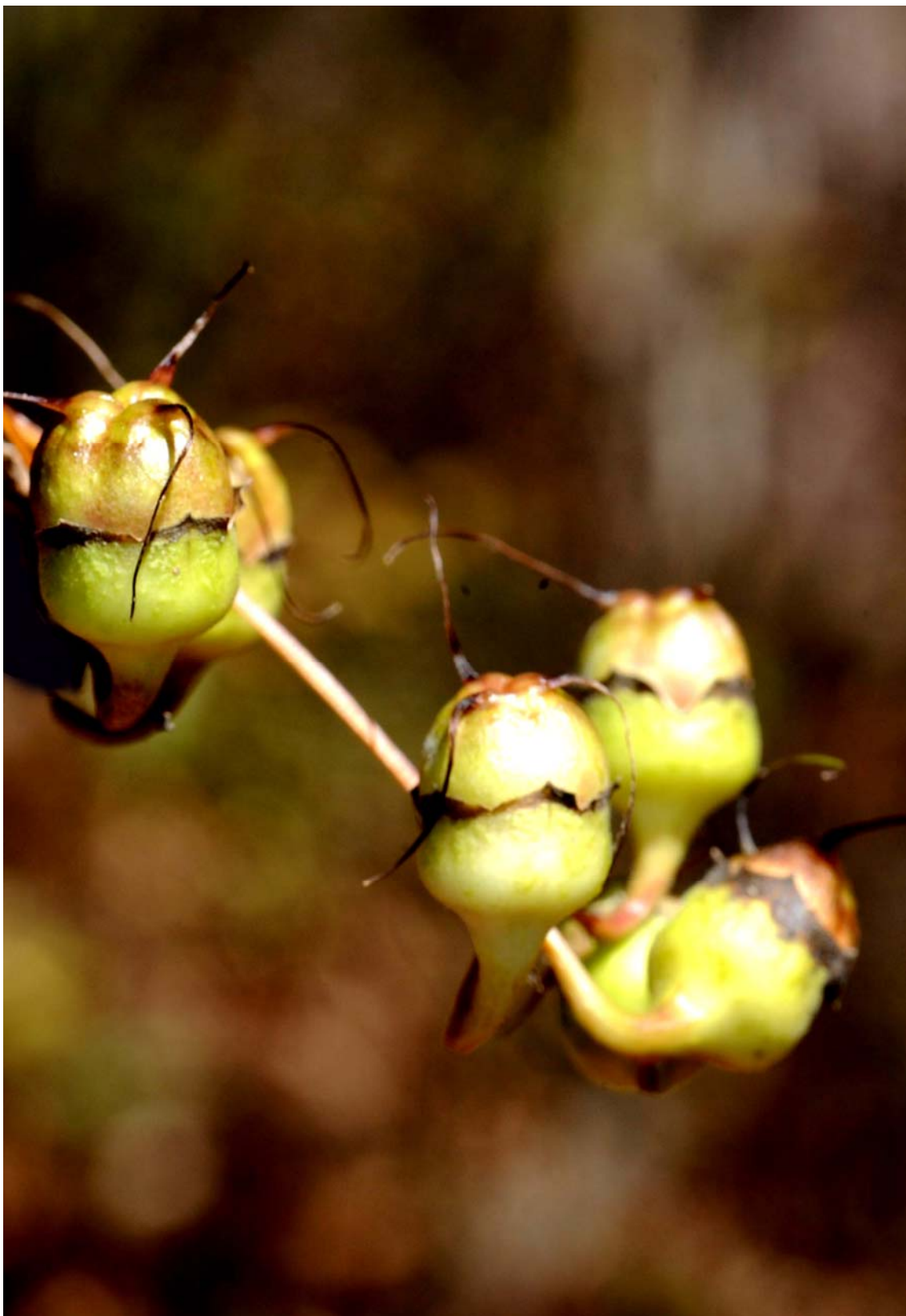
キレンゲショウマはポツポツと咲いて、静に散ってゆく。この季節は意外と雨が多い。自然気象に対応する仕組みになっているのかも知れない(2016年08月31日長野県軽井沢町)。



前頁の写真を撮影してからちょうど1年がたって、2013年8月26日再び撮影に出かけた。最初の花は散ったあとがあり、これは2番目に咲いた花。もう一度チャレンジしたい。



キレンゲショウマの花(2013年9月6日、天候に恵まれずこれが最期の花になってしまった。)
この花は宮尾登美子の小説『天涯の花』で有名になった。小説は徳島新聞に1996年8月25日から1997年2月23日まで半年間連載された。またNHKでもテレビドラマ化されて、1999年11月6日と13日に連ドラとしてオンエアされている。物語のあらすじは養護施設で育った珠子は、中学を卒業すると徳島県剣山の山中にある剣神社の官司夫妻に引き取られて、巫女としての生活を始める。ある日山中で遭難した男を発見し、やっとの思いで神社まで運ぶ。男は東京からやってきたカメラマンで、キレンゲショウマを撮影に来たのだという。必死になって看病を続けるうち二人の間にはやがて恋心が芽生えるが、この後は小説で。



これはキレンゲショウマの若い種子である。前種のレンゲショウマの種子(04-01-16)も花に似合わぬものだが、本種も同様に、美しい花とは対照的にグロテスクな種子である。

[目次に戻る](#)